

優しさと厳しさと

先生とのお別れはあまりにも早すぎ、未だに実感が湧かない。ご講演の帰りに大阪でお会いしたことがあったが、あれが最後だっただろうか。「ちよつと体を壊して」という言葉こそうかがってはいたものの、「ちよつと」を文字通りに解し続けていたのは我ながら愚かであった。

先生は比較文学研究の第一人者として古今東西の書物に通じ、その関心は島崎藤村やダンテに留まらず、司馬遼太郎や山田風太郎、お宅にお邪魔した時には山下和美のマンガ「天才柳沢教授の生活」が書棚に並んでいたのも忘れられない。それでいて、一冊か二冊かの文庫本を読んだに過ぎないような学生（その筆頭に私がいるのだが）の感想や疑問にも、真剣に向き合って下さり、決して上から見下すような態度で接することがなかった。先生を慕う人が多いのは、博覧強記と大胆にして緻密な学風だけでなく、この偉ぶらない姿勢のためでもあったかと思う。しかし、それだけにNOとおっしゃる時の毅然たる姿、悪しきものを悪しと、疑わしきものを疑わしいとはつきりおっしゃる時の姿は、既成の権威や習慣、その場限りの流行や人情に押し流されまいという強い御意志が感じられ、襟元を正される思いがした。

剣持武彦先生の御冥福を心よりお祈り申し上げます。